

## 前期ハイデガーの芸術把握におけるデールタイの芸術論からの影響について<sup>1</sup>

木下由裕(東京大学)

ハイデガーの芸術論の解釈は、これまで主に中後期<sup>2</sup>の彼の著作をもとになされてきた。中後期になってはじめてハイデガーは芸術について積極的に論じ始めたのであり、そうした解釈動向は当然のことと言えるかもしれない。しかし、ハイデガーの前期から中後期への思想の移り変わりという観点で見た時、前期ハイデガーが芸術についていかに捉えていたのかを考えてみることは有益なことであるように思われる。というのも、前期における彼の芸術把握と中後期におけるそれとでどれほど差異が認められるのかということは、彼の思想の移り変わりに直接結びついた主題である可能性があるからである。前期の芸術に対する見解をそのまま中後期になっても使用し続けたのか、それとも全く異なる芸術把握を中後期には行うようになったのか、こうしたことを明らかにするには、第一に前期の芸術把握を明らかにすることが必要な一事となる。

本発表は、こうした研究状況に鑑みて、前期ハイデガーの芸術把握を明らかにすることを目的とし、その考察にあたり、前期の彼の芸術把握に見られるデールタイの芸術論からの影響という観点を一つの軸とするものである。こうした考察は、中後期ハイデガーの芸術論の原点を明らかにし、それゆえ彼の芸術論がいかにして形成されたのかを明らかにすることに寄与するはずである。本発表の見立てでは、前期ハイデガーはデールタイの芸術論を批判的に受容することで自身の芸術把握を練り上げたが、中後期の彼は、デールタイの芸術論に見られる、芸術を主体性との関わりから把握する近代的な考え方を前期以上に徹底的に批判し、退けており、その限りで前期と中後期の芸術に対する見解には相違が見られる。

デールタイの芸術論とハイデガーの芸術論との間の関連に関しても、従来ほとんど研究がなされてこなかった。デールタイとハイデガーの比較研究の多くは、前期ハイデガーの事象的生や解釈学に関する思想がデールタイの「生の哲学」から受けた影響を明らかにするものであった。ハイデガー自身、デールタイの芸術論についてはほとんど触れておらず、こうした研究状況も当然のことであるかもしれない。しかし本発表の見るところでは、前期ハイデガーの芸術把握は多分にデールタイの芸術論に見られる考え方を多分に含んでおり、前期ハイデガーがデールタイの芸術観を批判的にではあるが、受容していたと考えることができる。

まず本発表は、デールタイの主著の一つである『体験と詩作』を中心として、その周辺の著作も参照しつつ、デールタイの芸術論

を概略する。『体験と詩作』を中心に据えるのは、この著作が、ハイデガーの1920年夏学期講義ではデールタイの「最も重要な著作」の一冊として挙げられ(GA59, 154-155)、さらに『存在と時間』においても登場する(SZ, 249)からである。

デールタイによれば、芸術は「生の連関(Zusammenhang)」、「生存関連(Daseinsbezüge)」ないし「生についての理解」を「呈示(Darstellung)」するものである(XXVI, 115, 127)。つまり、芸術は単に対象が何であるかを示すものではなく、我々が生についていかに理解できるのかを示すものである。彼は、通常我々に忘れ去られている根源的な生が表現へともたらされるものとして芸術を捉え、芸術を根源的な生から基礎付けようと試みる。こうした芸術観は、主観と客観を区別し、内面的な生が外へと表現されるという、主体性をもとに芸術を捉える近代的な考え方に囚われたままであったと言える。

次に本発表は、事実性の解釈学の時期から基礎的存在論期に至るまでの前期ハイデガーの芸術把握を概観しつつ、そこにはデールタイの芸術論からの影響が見て取れることを示す。デールタイ芸術論から前期ハイデガーが影響を受けているということは、前期ハイデガーが芸術について述べる際にデールタイの名を引き合いに出している箇所がある(GA24, 246-247)ことからわかるが、それに加えて、事柄的には次の二つの点で見取ることができる。第一に、前期ハイデガーもまた、根源的な生ないし現存在(Dasein)との関連から芸術を捉えている点を挙げることができる(GA24, 17; GA58, 34-35; GA60, 11)。第二に、前期ハイデガーにおいても、芸術は「ある存在者の理解と、世界におけるその存在者の存在についての理解」を「呈示」とされ(GA21, 363-364)、単に対象が何であるかを示すものではなく、その対象がいかにあるか、つまり対象についての理解を呈示するとされている点を挙げることができる。

ただし、前期ハイデガーはデールタイの芸術論を無批判に受容したというわけではない。基礎的存在論期のハイデガーは芸術を、主観的な生とは区別される現存在との関連から捉えることになるが、それはデールタイ的芸術観の実存論化であったと言える。その限りでは、前期ハイデガーは主体性に基づく近代的な芸術観からの脱却にデールタイ以上に成功したと言える。このように、前期ハイデガーはデールタイの芸術論を批判的に受容していたのである。

しかし、前期ハイデガーも、現存在=生存(Dasein)との関わりから芸術を捉え、また芸術を何らかのもの「呈示」と捉えているのであり、その点では依然として何らかの主体を想定してしまっているように思われる。前期ハイデガーは、主体性から芸術を捉える近代的な芸術観から完全には脱却することができなかったのである。これは、デールタイの芸術論を批判的にとは言え受容してしまったが故に前期ハイデガーが被った被害であると言える。

ところで、前期とは異なり、中後期ハイデガーはそうした主体との関連から芸術を把握する近代的な考え方を徹底して拒絶し、既成の見解を押し付けるという仕方をせずに芸術について思索しようとするようになる。このような中後期の芸術論も視野に入れることで、本発表は、前期の芸術把握から中後期の芸術論への転換の道筋の一端を明らかにすることになる。

<sup>1</sup> ハイデガーからの引用は、Vittorio Klostermann社の『ハイデガー全集』からとし、略号GAの後に巻数と頁数を括弧に入れて記した。『存在と時間』についてはMax Niemeyer社の第11版(2002年)を使用し、略号SZの後に頁数を括弧に入れて記した。デールタイからの引用は、Vandenhoeck & Ruprecht社の『デールタイ著作集』からとし、巻数と頁数を括弧に入れて記した。

<sup>2</sup> 本発表では、ハイデガーが芸術論を積極的に展開し始めた1930年台以降の時期を中後期とし、それ以前を前期とする。こうした時期区分は、ハイデガーの芸術論に限ってみれば、30年代のはじめはハイデガーの芸術に対する考え方が変化している可能性がある時期であるが故の措置である。